



— ふ ぐ る ま —

図書館だより 166号

(2012.1.1)

三郷町立図書館

三郷町勢野西1-4-4

TEL/0745 (33) 3030

FAX/0745 (33) 3188

<http://www.lib.sango.nara.jp/>

<http://www.lib.sango.nara.jp/mobile/>

謹 賀 新 年

あけましておめでとうございます。
いつも町立図書館をご利用いただきありがとうございます。
今年もどうぞよろしくお願いいたします。

昨年3月に起こった東日本大震災により多くの方が被災され、今もなお困難な生活を過ごされています。被災地の復興、復旧がさらに進むことを願うばかりです。

さて、今回利用者から素敵な読書感想文が寄せられました。図書のアらすじも含め挟み込みにしましたので、ぜひお読みください。図書館ではこうした読書感想文は大歓迎です。お読みになった感動をぜひお寄せ下さい。



図書館カレンダー

1 月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2 月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29			

・毎週水曜日

・1月1日(日)～3日(火)年始休館

・1月5日(木) 館内整理日

・1月9日(月)成人の日

・2月6日(月) 館内整理日

・2月11日(土) 建国記念の日

・2月13日(月)～19日(日)

特別整理休館

今年は、山歩きに挑戦してみませんか？

ここ数年、日本では、登山人口が増えています。

中高年の登山ブームや、若い世代、特に女性の間で登山を楽しむ人たちが急増しており、テレビ、雑誌、インターネットなどでおしゃれな服装で登山を気軽に楽しむ「山ガール」という言葉をよく見かけるようになりました。初心者でも楽しめる山歩きスポットや入門者向けの登山ガイドも見られるようになっていますが、



山のことをよく調べ、どこまでが気軽に楽しめるのか、どこからしっかりとした装備や経験が必要な登山であるのかの見極めが重要です。特に中高年の遭難事故が増えています。無理をせず、遭難など事故のないように楽しみたいものですね。

日本百名山

昨今の登山ブームの火付け役はこの本でしょうか。1964年に出版され、第16回読売文学賞を受賞したこの本は、著者の深田久弥氏が個人的に選定されたもので、三つの基準があります。第一は山の品格、第二に山の歴史、第三には個性のある山、さらに付加条件として標高 1500m 以上の山というものです。この選定についてはいろいろ意見もあるようですが、優れた登山入門書のひとつであり、この本を通じて今まで知らなかった日本の山々の魅力を知り、自分もこれらの山に登ってみようという「日本百名山ブーム」が起きました。

「日本百名山」

深田久弥：著 B291.07



『日本百名山』その後 山頂の憩い 深田久弥：著 B291.07
「日本百名山登山ガイド」上・中・下 291.09ニ
「日本百名山」 白旗 史朗：編 748シ

登山入門

山歩きをはじめる人のための入門書です。
楽しく安全に楽しみましょう。



「山で元気に！田部井淳子の登山入門」

田部井淳子：講師 786.1タ

「初めての山歩き」

伊藤幸司：著 786.1イ

「知識ゼロからの山歩き入門」

小倉薫子：著 786.1オ

映像資料も所蔵しています。

「DVD 登山学校 1巻～6巻」

DVD

「山ガール」 女性の山歩き

山ガールとは、かつての登山用品とは異なるファッションブルなアウトドア用衣料を身に着けて山に登る若い女性のこと（ウィキペディア 「山ガール」より）

「田部井淳子のはじめる！山ガール」	NHK 出版：編	786.1タ
「ひとり登山へ、ようこそ！」	鈴木みき：著	786.1ス
「エヴェレストの女たち」	田部井淳子：編	292.58エ



中高年の山歩き

山歩きは自分のレベルに応じて選べるので年齢に関係なく、何歳からでも始められます。

「六五歳ますます楽しい山山」	本多勝一：著	786.1ホ
「楽しい登山 中高年の安全な登山のために」		786.1モ
「中高年に贈るラクラク登山術」	石丸哲也：文	786.1イ



遭難に備えて

「遭難のしかた教えます」	丸山晴弘：著	786.18マ
「トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか」	羽根田治：著	786.18ト

手軽にできて健康的、さらに自然に親しむことによって得られる爽快感、満足感、リフレッシュするには、うってつけの山歩き、でもくれぐれも山を甘く見ないで、慎重に、安全に楽しみましょう。



ぬいぐるみの図書館おとまり会

子どもたちにお気に入りのぬいぐるみをお持ちいただき、一緒におはなし会に参加後、ぬいぐるみだけ図書館におとまりします。翌朝、ぬいぐるみを迎えに来た子供たちに図書館で過ごしたぬいぐるみの記念ミニアルバムをお渡しし、一冊の絵本を紹介します。

事前申し込み	1月6日（金）9時30分より受付開始	先着 15名
とき	21日（土）午後4時～	ぬいぐるみとともにのはなし会
	22日（日）午前9時30分～	ぬいぐるみをお返しします。
ところ	図書館2階 開架室	
参加費	無料	



1月の行事予定

☆ おはなし会 （おはなしルーム）

8日・15日・22日・29日（毎週日曜日です。）

▽小さい子ども向けのおはなし—午前10時30分～10時50分

▽大きい子ども向けのおはなし—午前11時～11時30分

★ 土曜の午後のおはなし会 （おはなしルーム）

28日（土）午後2時



☆ ゆりかごおはなし会 （おはなしルーム）

24日（火）午前10時30分

★ブックスタートのお知らせ

31日（火）午後2時より

保健センターにて

7か月児健診対象の赤ちゃんと保護者の方

☆ 図書館上映会 （視聴覚室）土曜日・午後2時開演（開場 午後1時30分）

7日（土）「男はつらいよ13 寅次郎恋やつれ」（1974年）104分

監督：山田 洋次 主演：渥美 清・吉永 小百合

14日（土）「弁天小僧」（1958年）86分

監督：伊藤 大輔 主演：市川 雷蔵

21日（土）「大いなる西部」（1958年）167分

監督：ウィリアム・ワイラー 主演：グレゴリー・ペック

28日（土）「たそがれ清兵衛」（2002年）116分

監督：山田 洋次 主演：真田 広之



☆生涯学習室開室のお知らせ

（図書館利用カードをカウンターまでお持ちください。）

期間：毎週土曜日・日曜日と1月6日（金）

時間：午前9時30分～閉館30分前まで（休館日を除く）

対象：町内在住の利用者



編集後記

明けましておめでとうございます。今年はどんな年になるのでしょうか。穏やかで、みんなが安心して暮らせる年になるように祈らずにはられません。

読書ノート

この間、ある外国語で『読書と人生観』というテーマでスピーチするテストを受けた。普段から新聞を読み、幼いときから本好きで無数の本を読んでいるが、「自分の人生観に決定的な本は何か」と聞かれると意外にわからない。だからその時は、「自分が子どものころに読んだ本で最初に印象に残っているのは何か」と考えた。確か初めて買ってもらった本は『三匹のこぶた』だったと思う。が、さすがにそれは人生観に関係ない。記憶によみがえっ

て来たのは『だんまり鬼十』(作 前川康夫)だった。それは35年ほど前に出版された児童文学で、いとこに譲ってもらって読んだのである。細かな筋は覚えていない。けれども主人公の特徴や生き方が印象に残っていて、それを頼りに話をしてその場はしのいだ。

その時「自分は、どうしてこの本のことをいつまでも覚えているのだろうか？」と考えたが、はっきりしたことは思い出せない。覚えているのは「主人公が『鬼十』という名前ですぐに口を開かず無口の漁師であり、物語の最後に大人物になるけれども、終わり方はそれ程単純ではなかった」だけである。図書館で借りて読み返した。そしてまだ小さな子どもだった自分がなぜこの「さえない名前の本」に強い印象を受けたのか考えた。

これは「正しい弱きものが悪い強きものをくじく」といった単純な物語ではない。テーマは勧善懲悪ではなく、「労働とは誰のためにするのか」、「人間は誰のために生きるのか」、「自然とは誰のためにあるのか」そして「時代が変わろうとするとき、人はどのように生きればいいのか」という、大人でも即座に答えられないような問題が提起され、しかも子どもが読んでも深い示唆をうける物語である。

鬼十は北海道のある漁師の村に孤児同然に住み始めた子ども。無口で吃音がひどく、自分の中に引きこもり勝ちだった少年は、自分の育ての親となった漁師の網もとの家庭からも、周囲の子どもたちからも冷たくあしらわれる。そしてある夜、死んだはずの父親と出会い、「一人前の漁師になれ」と言われて、それから一心に努力する。漁村では、久兵衛親方が強欲な独裁者として他の漁師、漁場を支配している。鬼十は彼の妻に、本当の母親のように可愛がられて立派な若者に成長する。彼女が死の病に倒れたとき、鬼十への最後の言葉は「海は村人たちみんなのもの。親方から海をとり戻してあげてほしい」だった。鬼十の生活は「一人前の漁師になり、親方から海を村人にとり戻す」ことに目的がしぼられ、何年にもわたる努力の果てにその目的をはたす。だが、ここで「主人公は村で最も尊敬される漁師になり、お金持ちになって幸せに生涯をおくりました」と終わらないところが、この物語の魅力である。ニシン漁を伝統とし、それで生活の糧を得てきた村人たちが危機に直面したとき鬼十がとった行動とは・・・。

それを知るとき、読者は「希望とはなにか」と改めて考えざるを得ないだろう。「若者に、つましくても生活できる仕事があり、子どもたちが笑顔でいられるところ」にこそ「秋の日のすんだ陽光のような希望」がその地域にあるのではないかと・・・。

『だんまり鬼十』 （作 前川康男 フレーベル館）

—あらすじ—

北の海の話です。夏のおわりのころ、漁にでた漁師が、沖で一そうの小さな船を見つけました。船には七歳くらいの男の子が、たったひとりで乗っているだけで、おとなは乗っていません。

「おど、おどよう！」

その子どもは、泣きながら、そうさげびました。おどとは、おとうさんのことです。

ふしぎなことに、その子は、どこからきたのか、住所は？どうして、ひとりになったのか、両親の名前は？坊やの名前は？いくら聞いても返事をしません。ほんとに、奇妙なわらしこ（子ども）でした。

そのころ、この村には久兵衛という親方がいました。船をたくさん持っている、村でいちばんの大きな網元でした。村の人が「どうしようか」と親方に相談すると。

「いや、役場には連れて行くな。もう少し、ここへおいておけ。帰る所も行くところもなければ、おれが、引きとってでもいい。ひょっとすると、このわらしこ、いい漁師になるかもしれん」

親方はそんなことをいいました。親方がどなりつけるような言いかたで名前を聞くと、その子は、やっと、「キジュウ・・・」といいました。鬼十が元気をとり戻すと、二、三日がかりで話を聞きだし、やっと少しようすがわかってきました。

やはり村の人が考えたとおり、鬼十は父親とふたりで漁にでて、とちゅうであらしにあったのです。小さい船ですから、波にもまれて、二、三日、漂流をつづけました。そして鬼十の父は船の波をかきだしているとき、海に落ち、波にのまれてしまったのです。

鬼十が自分の村の名まえを言ったとき、みさきから少しはなれた島に、おぼれて死んだ男が流れつきました。それは鬼十の父親でした。けれども漁師たちがいくらそう話しても鬼十は「おどは、帰ってくる」と言って泣いています。そうして自分の村に帰ろうとしません。そうしては親方の家で仕事をしながら暮らすことになります。

無口で泣いてばかりいる鬼十は学校へもやってもらえず、親方の家で朝起きてから寝るまで仕事ばかりさせられ、近所の漁師の子どもたちにいじめられてばかりいます。ですがある日、子どもたちのいたずらで離れ小島に置きざりにされた夜、鬼十は父親と出会い、「一人前の漁師になったら、そのときにもう一度会おう」と約束されます。

それから十五年がたち、鬼十は立派な若者になります。いつも鬼十を大事にしてくれた、親方のおくさんは病気で死ぬ前に鬼十に「親方が村の漁師たちを苦しめていること。村人たちのために海を取りもどしてほしい」とたのみます。そして鬼十は数年ののちにほかの若い漁師とともにニシンという魚をとる漁で、久兵衛親方がひきいる漁師たちとたたかいを挑むのですが・・・。（小学校中学年から）